

ビナBOO

笑顔のために

青年海外協力隊
菊池 美貴



ベトナムの首都ハノイから西に車を走らせること300キロメートル。山の斜面一面のトゥモロコシ・コーヒー畑、車道をふさぐ水牛の群れ、高床式住居、華やかな民族衣装を着た女性たち…。自然に囲まれ、ゆったりとした時間が流れる山岳地帯に、私の活動先であるソンラ省はあります。

ソンラ省は人口の約80パーセントが、言語や民族衣装・食事・住居などが異なる12の少数民族です。黒いスカートをはき、バイクのヘルメットが浮くほどの大きなお団子髪を結っているのは、黒タイ族の女性。赤・ピンク・紫など色とりどりの華やかな刺繍をした衣装を着ているのは、モン族の女性。各民族それぞれに特徴があり、多様性に満ちています。周囲の人を大切に、何かあるたびに親せき全員で集まり、お客を呼び、お酒を飲んで互いの健康に乾杯し合う。喜びも悲しみもみんなで分かち合うという文化が、ここには根付いています。

私は、省都ソンラ市内にあるリハビリテーション病院で理学療法士として活動しています。患者のほとんどが少数民族なので、民族語や民族独特の文化を教わるなど、いろいろな発見がある毎日です。治療を通して見られる「体が良くなった、ありがとう」という笑顔が、ここでの生活の励



みとなっています。

しかし、リハビリに関してはまだまだ認知度が低いのが現状です。少数民族は国の補助で医療費が免除されているにもかかわらず、活動先病院の入院患者のうち、早期からリハビリの介入ができていたのはたったの17パーセント。それ以外は、省内の郡病院を受診後、リハビリが必要な状況であっても家に帰され、何ヶ月もたった後にリハビリ病院の存在を知り、リハビリを開始するケースが大半。そのころには、関節が固くなったり痛みが強まっていたり、二次障害を起こしてしまっています。日本であればほぼ完全に回復できるけがも、悪化し、後遺症が残ってしまった患者を多く見かけます。早期リハビリにより防げたであろう障害を持つ患者に会うと、悲しく残念な気持ちになります。

この問題を省の保健局に伝えたところ、合計3回にわたり、省内14の病院、204の市町村や集落からすべての医療関係者が集まる会議の場で、早期リハビリの重要性について講演する機会を得ました。各病院と連携を取り、早期リハビリが実現できれば、患者はより早く無理のない回復が期待でき、より良い生活が送れるということを伝えました。聴講者は非常に熱心で、リハビリについて興味を持ってもらうことができ

ました。ここベトナムは人と人とのつながりを大切にするので、地域関係者に知ってもらうということは、とても重要なことです。徐々に状況は好転していくのではないかと期待しています。会議の後の親睦会では、いろいろな方が声をかけてくださり、いつか省内すべての町に遊びに行くぞ!と密かに決意しました。

毎日の病院内の活動の中で、時としてもどかしい気持ちになることもあります。しかし、そんな時は同僚や周囲の方達が気遣い助けてくれます。この1年間、悲しいことや大変なことも多々ありましたが、いつも救ってくれたのは同僚や患者、そしてその家族です。みんなの笑顔のために、自分ができることをする。それは、私自身が日々ソンラの方々から笑顔をもらっているから目指せるのだと思います。残りの期間で、少しでも恩返しができるよう、頑張っていきたいと思います。

●プロフィール

菊池 美貴 (きくち・みき)

愛媛県出身。大学で理学療法学科を専攻。卒業後、理学療法士として東京都内の高齢者病院で6年間勤務する。2014年8月から青年海外協力隊員としてソンラ省リハビリテーション病院に赴任。患者への治療を行うとともに、同僚スタッフの理学療法に対する知識・技術向上を目指し活動している。